



## 医師不足地域を支える医師



磐田市立総合病院  
消化器内科部長  
山田 貴教 先生

このメッセージを読んでくださっている若手の方がご自身の医師としての成長を期待していると想定して書かせていただきます。医師としての成長に必要なものはなんでしょうか。私は少なくとも3要素あると考えています。まずは本人の資質（熱心さ、記憶力、体力など）、次に環境（良い指導医、同僚・スタッフ、図書・検索設備など）、そして最も重要なものが、経験（実際に患者さんを診察すること）です。他にも思いつく方はいるでしょうが、今回はこれらに絞って考えましょう。

古い考えのようですが、医師に最も必要で力強い武器として経験に勝るものはありません。書籍やWebから得られる知識は全て他者のフィルターを通したもので、多様な症例を前にしてはその武器の使用には躊躇することも多く、時には無力なこともあります。そこで、この重要な経験（値）を増やす方法を考えましょう。経験値を診察できる患者さんの数と定義すると、経験値 = (担当地域の患者さん数) ÷ (診療にあたる医師数) となりませんか。医師不足の指数もほぼ同様の方法で算出されます。つまり、医師不足地域での研修・診療は若手には成長のチャンスなのです。

次に、本人の資質のうち熱心さについて。初めは、どれほど熱心でも、多忙を極め、余裕がなくなるとは、その熱心さも削がれてしまいます。遠い昔の経験ですが、私にもその記憶は残っています。そこで、私は診療科の長を任された後、働き方改革の波を利用し、休日は若手、ベテラン問わず、完全平等の入院診療を含めた当番制を当科に導入しました。これにより、重症例を抱えている若手もコールの全くない休日が確保され、英気を養い、更に成長することができていると信じています。結果、スタッフからの評価は上々ですし、診療実績も向上しました。

環境についてですが、指導医については相性もありますし、私の評価も様々でしょう。ここは運です。COVID-19の影響を受け、オンラインで参加できる学術集会、視聴できる講演や資料も増え、都会でしか参加できなかったものも地域を出ずに参加できる良い時代となりました。どうにでもなります。

最後に、当科の宣伝をさせてもらえば、指導医も揃い、海外での学会報告、英文を含めた論文指導、先端の内視鏡治療なども実施しており、若手のキャリア形成に不足はないと思います。

どうでしょう、医師不足地域で働く気持ちになりましたか？